

おわりに

ふるさとを育み俣させる川

この間、「川の日」ワークショップのグランプリの検証を兼ねて、延藤先生たちと矢作川、城原川、筑後川、北川などを視察してきた。それぞれの川がグランプリにふさわしく、いい川・いい川づくりの公開審査方式の重要性を再認識した。その折り心をよぎりつつ、悩ましていた「いい川・いい川づくりとは何か」を一言で表すキーワードが、ようやく見えてきた気がする。きっかけは、次の二つである。

一つは、読売新聞10月7日に、浅羽雅晴編集委員は、「タマちゃん」に関連した記事で、「川は日本人のふるさとを思う気持ちとつながっている。海あり森あり湖ありの豊かな自然から、ふるさとを『山と川』で代表させたのは万葉歌人、柿本人麻呂だといわれる。それ程われわれの文化に深くしみ付いてきた。」と述べている。これだっという気がした。

いま一つは、北朝鮮（朝鮮民主主義人民共和国）から帰国された曾我ひとみさんは、ふるさと佐渡への帰郷の挨拶で「人々の心、山、川、谷、みな温かく美しく見えます。空も、土地も、木も私にささやく。おかえりなさい。・・・」と語る（10月17日）。感動的な詩である。涙流した人も多かったのではないかと思うが、私は、そこにいい川・いい川づくりの本質が歌われているのではないかと考える。

ふるさとは、その地域の風土と密着した町や集落、水田や畑や里山、水利システムが、生活と文化がある。そして、その軸に山と川がある。山と川は、ふるさとの代名詞と言ってもよい。日本的自然観の象徴的表現であろう。

近代化、ことに60年代以降の高度成長は、その「山・川」と「ふるさと」を切り離してきた。工事的川づくりは、地域に根ざした生活と文化を無視とはいわないまでも、ふるさとを育むという視点は弱かった。また自然科学や工学も、川をふるさとと切り離し、川を独立的な空間として対象としてきた。土木工学、生物学しかりである。

治水では流下能力や治水安全度など、利水では河川水の有効利用など、環境では水質、生物、景観などについて、現代の科学・工学の水準をもってすれば、それぞれの分野を限定すれば科学的な評価尺度を設定することは無理ではないであろう。そこまでは来ている。だが、それを足し算しても包括的な「いい川・いい川づくり」の答は見つからないのではなかろうか。

川を独立的な空間として対象としてきたからこそ、学問的には進展してきた側面はあるとしても、いい川・いい川づくりは今一度、原点の「ふるさと」に還る時期に来ている。

「ふるさとを育み俣させる川と川づくり」である。

「ふるさと」をキーワードにすれば、川は単なる空間ではなく、「川と人との関係・人と人との関係」の総合的なものになり、「いい川」と「いい川づくり」の重複化も、本当の川・ふるさとの再生の第一歩のように思えてくる。

ともあれ、川の宝物とは何か、川とは何かを私達に語ってくれる「川の日」ワークショップは、私が当初に思っていた以上に、大きな意味をもっているのではないかと感じている。

「川の日」ワークショップ実行委員長
森 清和（全国水環境交流会代表幹事）